言語文化研究　第４号　157-173　2026年３月
Linguistic and Cultural Research
Vol. 4 March 2026 pp. 157-173.

論　文

「中途終了文」における ポライトネスとインポライトネス

―― 日中対照研究に関する先行研究の概観と今後の課題 ――

王　　紫　莹

１．はじめに

筆者の研究の目的は、日本語と中国語の中途終了文を研究対象とし、文法・談話機能・語用論・翻訳の視点から中途終了文を分析することである。そこで本稿では、先行研究を振り返りながら、問題点をまとめた上で、中途終了文についての研究の課題と展望を述べる。最後に、中途終了文について考察を試みる。

日本語の日常会話の中では、以下の例のように、文の途中で言い終わる文がよく見られる。

(1) あかね：ごめんね、せっかくの土曜日なのに。
千佳：ぜーんぜん。部活もやってないし、暇ですから。
（『空の青さを知る人よ』、下線部は筆者による。以下同じ。）

(2) 帆高：お引越しなさったんですね。ほら、前はもっと下町っぽい場所で…。
おばあさん：あの辺りは一面水に沈んじゃったからね。
（『天気の子』）

(3) 志摩子：キスとかジュンチョーにしてんでしょう。
敦子：んー、まあねえ……
（劉，2003，p. 281）

(1)（2）（3）のような文の途中で言い終わる表現は、先行研究において、初めてこの概念に言及したのは国立国語研究所（1960）である。国立国語研究所（1960）によれば、(1）のような接続助詞で終わる文は社会習慣として扱われ、陳述を負う述語がすでに存在するため、一人前の文と認定する（pp. 5-6)。一方、(2）や（3）のような文は、「文の成立条件である陳述を負う述語・独立語を欠いている」ため、不完全な文、すなわち「省略文」と定義する（p. 61)。

このような不完全な文である「省略文」は、他に「言いさし」（荻原，2008；佐藤，1993)、

「言いさし文」（白川，2009）、「言いさし表現」（曺，2004；朴，2012）、「文末の省略」（水谷，1989）、「主節の省略」（益岡・田窪，1992）、「省略ののべかけかた」（高橋，1993）、「中途終了型発話」（宇佐美，1995；陳，2000）、「中途終了型発話文」（楠本，2015）、「中断節構文」（大堀，2002）、「発話末省略」（伊集院，2004）など、様々な用語で呼ばれている。また、それぞれの研究対象の範囲も異なっている。本研究で扱う「省略文」はより広義的であり、接続助詞で終わる文だけではなく、他のタイプも含まれる。そこで本研究では、「言いさし」という言い方を避け、(1) と (2) のような文を「中途終了文」と呼ぶ。これについては、第２章で先行研究を踏まえながら、改めてその対象を明確にする。

その後、第３章では、日本語と中国語における中途終了文についての先行研究をまとめる。第４章では、日中両言語の中途終了文におけるポライトネスの先行研究について概観する。第５章では、中途終了文の考察を行う。第６章では、先行研究の問題点を検討し、今後の課題について述べる。

２. 中途終了文の定義に関する先行研究

２．１　中途終了文の定義における三つのタイプ

中途終了文の定義は、構文的特徴に基づき、主に接続助詞で言い終わるタイプ、文の途中で言い終わるタイプ、間投詞で終わるタイプの三つに分類できる。

接続助詞で言い終わるタイプでは、白川（2009）が代表的な研究として挙げられ、その他、佐藤（1993）、曺（2004）、朴（2012）などもこの分類に属する。文の途中で言い終わるタイプの研究では、荻原（2008）の研究が代表的な研究として挙げられ、その他、山路（2009）、呉（2022）、大塚（2025）なども考察したことがある。そして、間投詞で終わるタイプに関しては、劉（2003）、呉（2016）などがある。

２．１．１　白川（2009）の「言いさし文」

白川（2009，p. 2）によれば、「言いさし文」とは主節を欠いている文であり、一見不完全な文のように見えるが、少なくとも意味的には完全な文と同等の完結性を有している文である。つまり、「言いさし文」は接続助詞（「から」「けど」「が」など）で言い終わる文である。例は (4) である。

(4) こずえ：ほかにつきあってる女の子いるのかしら？
　　響子：さあ……あなただけみたいですけど。
　　こずえ：ほんとですか!!
　　響子：ええ。

（白川，2009，p. 10）

そして、「言いさし文」は意味的に完全な文と同等の完結性を有している文なので、完全文の分析と同じような分析が行える。この点について、白川（2009, pp. 4-7）は、「言いさし文」の文法的位置づけについて次の三つの立場があることを指摘し、自身の立場は③に属するという。

①「言いさし文」を「完全文」に還元して説明する立場
②「言いさし文」を「完全文」とは別立てで説明する立場
③「言いさし文」と「完全文」を統一的に説明する立場

（白川，2009，pp. 4-7）

①の立場では、「言いさし文」は、不完全な文であるから、本来あるべき主節が省略されているという説明になる。益岡・田窪（1992）はこの分類に属する。

②の立場では、①と異なり、「「言いさし文」が特殊視されており、「言いさし文」と「完全文」における従属節との連続性が見えにくい」と考える。つまり、「言いさし文」における従属節と「完全文」における従属節は同じではなく、合わせて分析しないという。そして、国立国語研究所（1960）によれば、接続助詞で終わる文は「言いさしの省略」ではなく「文を構成している」という考え方がある。例えば、「ないときはしようがないけど」のように、社会習慣として扱われ、陳述を負う述語がすでに存在するため、一人前の文と認定する（pp. 5-6）。一方、高橋（1993）のような、接続助詞が終助詞化したものという考え方もある。

③の立場の特徴は、「述語句を階層的に捉えることを前提に、述語句という同じスケールの上でいわゆる主節といわゆる従属節を相対的に位置づけたことである」（白川，2009，p. 6）。つまり、「完全文」と「言いさし文」を同じく述語句として捉え、「完全文」における従属節と「言いさし文」における従属節を統一的に説明することを目指している。この立場は、主節を前提にせず、従属節だけで分析できると考える。例えば、白川によれば、「風邪の一種だと思いますけど……」のように、従属節だけで言いたいことを言い終えている文を「言いさし文」という。三上（1955）や南（1993）などはこの分類に属する。

白川（2009）の研究は主に文法研究が中心であり、「言いさし文」を分類し、その分類に属する接続助詞が各々どのような特徴を持っているのかを明らかにすることを目指している。そのため、語用論的な分析（談話分析やポライトネス理論による分析など）とは、視点が異なっていると考えられる。さらに、「けど」のような接続助詞で終わる「言いさし」しか考察していないため、他の「言いさし」については触れられていない。

２．１．２　荻原（2008）の「言いさし」

荻原（2008，p. 12）によれば、「言いさし」とは、「文末が省略されたために、文として完結されなかったもの」である。そして、「依頼・希望などの機能を持つ例に限らず、文末部分が省略されているために文としての形式が完全でないもの」はすべて「言いさし」である。例え

ば、「ファーストフードのレストランでアルバイトしたこと」「事件でもなんでも」「どうもありがとうございました。ほんとにお忙しい」はどれも「言いさし」である。このことから、単文の主節の文末部分が欠如している場合も「言いさし」であることがわかる。例は（5）である。

（5）（アメリカに来た時期について）
R：えーと E43さんは、アメリカはいついらっしゃった。
E43：えーとアメリカには八年前に
R：あーそうですか。
E43：はい。
（荻原，2008，pp. 13-14、下線部は引用者による。原文の下線部と記号は削除した。）

そして、「言いさし」になる場合を、荻原（2008）は五つに分類している（pp. 13-22）。

①言語的理由から省略部分が自明な場合
　a. 述語の繰り返しを避ける場合
　b. 慣用的にフレーズの一部を省略する場合
②ルール化した「言いさし―対応の連鎖」による定型的な対応の第一パートの場合
③話し手が情報の一部を省略する場合
④情報を持っている相手に対して働きかける場合
　a. 情報について詳しく説明してもらいたい場合
　b. 忘れたことばを教えてもらいたい場合
⑤相手の発話の一部を単語または句で繰り返しているが、その機能が異なっている場合
（荻原，2008，pp. 13-22）

そして、荻原（2008）によれば、白川（2009）による「言いさし文」は、接続助詞（「から」「けど」「が」など）で終わる節で、「その節に一つ以上の文型を含む場合のように、述部が認められなくても、情報として完結しており、内容的に省略した部分はないと客観的に判断できるものは、文に相当する」（p. 12）と述べている。

荻原（2008）の研究は主に発話解釈に基づいて分析する研究であり、「言いさし文」を分類し、関連性理論を中心に、繰り返しによる言いさし発話の解釈の観点から問題点を指摘し、それを基に新たな解釈の枠組みを構築し、最終的に発話解釈のメカニズムについて解明することを目指した。また、研究方法として談話完成テストとアンケート調査を用いている。そのため、本研究とは視点が異なっていると考えられる。さらに、荻原（2008）は単文の主節の文末部分が欠如している「言いさし」しか考察していないため、他の「言いさし」については触れられていない。

２．１．３　その他のタイプ

上の二つのタイプに加え、第３のタイプとして「間投詞で終わる中途終了文」が存在する。このタイプに言及した研究は極めて少なく、劉（2003）、呉（2016）が挙げられる。

劉（2003, p. 281）によれば、「まあ、あのう、ちょっと、でも」のように、後ろに発話内容が言語化していない無標の「言いさし」表現が存在すると考えられる。また、話し手は、発話意図を完全に言語化することによって何らかの支障を招くことを配慮し、文を途中で終わらせる用法であると指摘している。例は（6）である。

（6）志摩子：キスとかジュンチョーにしてんでしょう。
　　敦子：んー、まあねえ……

（劉，2003，p. 281）

一方、呉（2016, p. 40）によれば、コンテキストによっては、話し手が意図を明言しないことで、余韻が強く感じられるため、感動詞で終わる「言いさし表現」であると考えている。例は（7）である。

（7）南：あああ、もうちょっと待って！…オーケー
　　瀬名：あのう…

（呉，2016，pp. 40-41）

２．２　本研究による中途終了文の定義

中途終了文に関する先行研究では、主に以上の３種類に分けられる。そこで、本研究では、先行研究を踏まえ、中途終了文を、「形式上、途中で言い終わる文」と定義する。白川（2009）と荻原（2008）が論じる「言いさし」は、いずれもこの定義に合致するため、本研究において中途終了文であると認める。例は（8）と（9）である。

（8）（＝（1））
　　あかね：ごめんね、せっかくの土曜日なのに。
　　千佳：ぜーんぜん。部活もやってないし、暇ですから。

（『空の青さを知る人よ』）

（9）（＝（2））
　　帆高：お引越しなさったんですね。ほら、前はもっと下町っぽい場所で…。
　　おばあさん：あの辺りは一面水に沈んじゃったからね。

（『天気の子』）

（8）は複文の従属節のみ残され、接続助詞（「のに」）で終わる文であり、（9）は単文の主節の文末部分が欠如し、文の途中で終わる文である。いずれも本研究で扱う中途終了文に該当する。さらに、複文において主節の一部が省略される文も中途終了文として認められる。例は（10）である。

（10）あかね：どうしたの？
あおい：べ…別に。あか姉こそ、どうしたの？
あかね：その…ごめんね、今日は無茶させて。なんか、大きい舞台に立ったあおいを想像したら、つい…

（『空の青さを知る人よ』）

ただし、一つの間投詞のみで構成される発話は、発話の意味が限られるため、本研究では研究対象としない。例は（11）である。

（11）（＝（7））
南：あああ、もうちょっと待って！…オーケー
瀬名：あのう…

（呉，2016，pp. 40-41）

３. 中途終了文に関する先行研究

３．１　日本語の中途終了文の先行研究

日本語による中途終了文の使用状況に関する研究には、その代表的な研究として、白川（2009）、荻原（2008）が挙げられる。

白川（2009）の研究は主に文法研究が中心であり、広い意味で従属節だけで言いたいことを言い終えているか否かにより、「言いさし」の種類を「言い残し」と「言い終わり」の二種類に分けている。まず、「言い残し」は、言うべき後件（主節）を言わずに中断され、言わなかった内容は聞き手が見当をつけなければならない「言いさし」である。白川はこのような文は内容的には完結性が持っていないと考えており、そのため、研究対象から除外される。それに対し、「言い終わり」は「従属節だけで言いたいことを言い終わっている文」と定義される（p. 7）。「言い残し」と異なり、聞き手がコンテキストによって誤解なく理解できるため、推測する必要がないと言える。さらに、従属節の内容と関係づけられるべき内容が文脈に存在するか否かによって、「言い終わり」を「関係づけ」と「言い尽くし」に下位分類した。白川（2009）は、その分類に属する接続助詞が各々どのような特徴を持っているのかを明らかにすることを目指した。

白川（2009）は、まず、「言い尽くし」の言いさし文であるケド節（「風邪の一種だと思いますけど……」）（白川，2009，p. 25）、カラ節（「ワンゲルで高尾山行くから」）（白川，2009，p. 60）、タラ・レバ節（「こいつに部屋で長居でもされたら……」）（白川，2009，p. 72）について考察した。「言い尽くし」72の言いさし文においては、節の内容が聞き手に伝わり、その帰結は聞き手の判断によるために完結性が生じるという。また、聞き手に認識を改めさせたり、何らかの行動をするよう促したりするという、話し手の対人的な態度を表す（p. 91）。

次に、「関係づけ」の言いさし文、すなわちカラ・ノニ節（「拒否されるのがこわいから」）、シ節（「いや、まだ、そんなに踊れないし」）、テ形節（「助かった。ひとりじゃとても運べなくて」）について考察した。「関係づけ」の言いさし文においては、文脈上節の内容と関係づけるべき内容との繋がりが見つかるため、完全文と同等の完結性が生じるという。また、事態に接しての受け止め方（納得や意外）を表したり（カラ・ノニ節）、併存する事柄を追加的に認識したり、その存在を暗示したり（以上、シ節）、背後の事情を把握したり（「テ形」節）するなど、話し手の何らかの対事的な態度を表す（p. 162-163）。

荻原（2008）の研究は主に発話解釈に基づき分析する研究であり、その実証調査は談話完成テストの方法で行った。まず、会話目的達成スキーマに基づいた発話解釈が言いさしに適用されるかどうかについて検証し、適切な発話解釈が行うことができるという結論を得た。次に、談話完成テストの結果から見ると、会話目的達成スキーマに基づいた発話の解釈と談話完成テスト回答の合致率は、73.8％～ 97.1％と、かなり高い割合を示していることを指摘した。

そして、言いさし以外の発話も含まれていたけれど、両方の目立った相違がなかったと述べ、つまり、会話目的達成スキーマが、言いさし発話に限定して解釈の基準として使用されているわけではないということができるという（p. 256-257）。

３．２　中国語の中途終了文の先行研究

中国語の中途終了文は中国語の「半截**话**（中途半端な話）」に相当すると考えられる。先行研究が少なく、ここでは劉（2007）、楊（2002）を挙げる。

劉（2007）では、“半截**话**、指言**语**交**际**中**产**生的不完整的**语义语**法序列。**这种**不完整可能是主体有意**图**的一**种**自**觉**中止、也可能是无意**图**的意外中止。前者是**说话**者出于某**种**目的的考**虑**而故意未**说**完、后者**则**是由于他人打断、突**发**事件的干**扰**或**说话**者自身的原因、如情**绪紧张**、**迟**疑等未**说**完或**间**断再**续**。”（半截**话**とは、言語コミュニケーションの中から生まれた不完全な文である。この不完全は、話者に意図があって意識的に中断する行為による可能性もあれば、意図しない偶発的な中断である可能性もある。前者は話者がある目的に基づきわざと話を中断したことであるが、後者は他人から中断され、偶発的な事件が起き、あるいは話者自分自身の原因、たとえば緊張、ためらいなどの気持ちを持ち、話を中断したことである。）（p. 4、筆者訳）と定義した。

また劉（2007，pp. 6-18）は、「半截**话**」の語用論的なストラテジーを“弱化焦点”（「焦点を弱くする」）、“暗示**对**方承接”（「相手の返答を暗示する」）、“增加**认**知**负**荷与**语**力”（「認知負荷と“語力”（発語内行為）を増やす」）、“避**讳**禁忌**语**”（「禁句を言い出すことを避ける」）、“修正**语误**”（「誤りを修正する」）という五つの用法に分けている。

「焦点を弱くする」について、中国語には多くの疑問詞がある。疑問詞は単に疑問文になるだけではなく、その述語も焦点として明示している。通常、話し手の期待する回答範囲を明確

に示すことができる。しかし、この焦点はある程度、回答の選択肢を限定することもある。そのため、時には聞き手によっては答えにくい場合がある。従って、疑問文を言いさしで言えば、その焦点を弱くすることができる用法である（p. 6-11）。

「相手の返答を暗示する」の場合は、聞き手がなんらかの行為を実行することを意図して発話されている。しかし、聞き手が断れる恐れがあるから、言いさしで自分の考えを伝え、話し手と聞き手の両方の面子を保つ用法である（p. 11-13）。

「認知負荷と“語力”（発語内行為）を増やす」とは、言いさしで充分な想像の余地を残し、懸念を作り、言い出さない内容の重大性を増やすことである。このような言葉は必ず聞き手の認知に一定の困難をもたらし、心理負担を増やす。それに伴い、話者はある程度の優勢と支配権を持っている。話者はその懸念で相手をおどし、聞き手に何かの言語行動あるいは非言語行動を起こさせる力が一層強くなり、話者の意図が実現される用法である（p. 13-15）。

「禁句を言い出すことを避ける」は、「死亡」「離婚」などの禁句を直接に口にしないように言いさしで表している用法である（p. 15-16）。最後に、「誤りを修正する」は、話し手は自らの発話についての不足や誤りに速やかに気づき、修正する用法である（p. 16-18）。

楊（2002）は、「半截**话**」を二種類に分けた。一つは、文の前半だけを言って、後半の言わなかった内容が補足できるタイプである。ただし、その補足方法は一つとは限らないという。もう一つは、慣用表現として扱われ、文の中にある単語を勝手に変えることができないタイプである。そして、このような文はある程度の生産性を持っていると指摘している。

また、楊（2002）は「半截**话**」の修飾機能について、「誇張」「簡潔明瞭」「懸念を作る」「責めあるいは不満を表す」「親しみを示す」という五つの機能を持っていると述べている。この機能は、小説やシナリオなど文学作品の技法であり、日常会話と違い、特有の言い方である。

３．３　日中両言語の中途終了文の対照研究に関する先行研究

日中両言語による中途終了文の使用状況に関する研究では、その代表的な研究として呉（2016）と田（2016）が挙げられる。呉（2016）は、中国語と日本語の中途終了文を「言いさし表現」として取り上げ、両言語における言いさし表現の使用実態について対照研究を行った。

まず、呉（2016）は両言語のドラマと映画のセリフを使い、それぞれの言語における言いさし表現の構文的特徴を考察した。日本語の場合、言いさし表現は品詞の種類によって分類されている。中国語の場合、単文と複文に分けられ、単文は文の構造により分類され、複文は主従複文だけが扱われ、主従複文の分類に従って分類されている。また、格助詞と係助詞で終わる言いさし表現以外は中国語の中でも見られると述べている。そして、関連性理論に基づき、中日言いさし表現の対訳パターンを考察した。対訳パターンを「言い切り」と「言いさし」に分け、それぞれの対応状況を明らかにした。また、発話機能とスピーチレベルの視点から対照研究を行なった。呉（2016）は文体を丁寧体と普通体に分け、それぞれの発話機能を考察した。

その結果、「行為要求」の出現率において、丁寧体も普通体も日本語は中国語より多く見られた。「意志表示」の出現率において、丁寧体は、中国語より日本語で多く見られた。普通体の場合、中国語の方が少し上回っている。「情報提供」の出現率において、丁寧体の場合、統計上両言語の有意差が見られない。普通体の場合、日本語は中国語より多く見られる。「情報要求」の出現率において、丁寧体も普通体も日本語より中国語のほうが多く見られる（pp. 113-115）。

最後に、「要請・申し出」「理由説明」「勧誘」「断言を和らげる」「断り」五つの場面を設定し、ポライトネス理論からどのような対訳ストラテジーを使ったのかを分析し、対照研究を行った。結論として、中国語の言いさし表現はポジティブ・ポライトネスに近く、日本語の言いさし表現はネガティブ・ポライトネスに近いと指摘している。さらに、日本語の場合、話し手と聞き手の社会的関係によりポライトネス・ストラテジーが決まるといい、中国語の場合、社会的関係と関係なく、相手の利益になるのか、迷惑・負担をかける度合いによりポライトネス・ストラテジーが決まると指摘している（pp. 115-118）。

田（2016）は、日本語教育文法の視点から、「けど」節（が・けれど・けども・けれども・けど）で終わる「言いさし」に焦点を当て、日中両言語における「言いさし」の統語的・形態的・意味的・音韻的な使用実態および知覚処理状況を明らかにし、日本語教育の現場で使える形に記述して考察している。

まず、田（2016）は名大会話コーパスを使い、日本語「けど」類の「言いさし」を取り上げ、「主張を和らげる」「相手の反応を引き出す」という二つの発話機能があると指摘している（p. 68）。次に、「言いさし」の「けど」類（「～けど。」で表記しているもの）の使用頻度は接続助詞の「けど」類（コーパス上で「～けど、」で表記されているもの、及び「けど」類の後に句点なしで主節が後接する場合）より高いと指摘している（p. 75）。さらに、「言いさし」の「けど」類の中で、「言い終わり」の「けど」類は「言い残し」のより使用頻度が高いと指摘している（p. 75）。最後に、「言いさし」の「けど」類と接続助詞の「けど」類は共起する述語の出現頻度が異なり、いずれも特定の述語に偏っているものの、前接語が異なっていると指摘している（p. 77）。さらに、「言いさし」の「けど」類の場合、その共起する終助詞も調べ、「ね／ねえ」「さ／さあ」「な／なあ」があり、一方、「よ」「よね」は一度も共起していないと指摘している（p. 74）。

一方、中国語における「言いさし」について、同じ文脈の場合、日本語の会話文は「言い終わり」と「言い残し」がほぼ同じ頻度で使用され、中国語の会話文の場合、「けど」類による「言い残し」の場合は「けど」類の代わりに、接続表現を使用しない「省略型」及び接続表現を残す「省略型」の用例が多く見られたという。一方、「けど」類による「言い終わり」の場合は、「言いさし」のマーカーを除いて命題のみ述べる以外、語気助詞「啊」「呢」を使用する例文も存在することが明らかになったと指摘している（p. 91）。さらに、田（2016）は理由表

現マーカーとしての「因果言いさし」を取り上げ、中国語の「因果言いさし」の使用実態と、「断り」場面における待遇上の特徴、日中両言語の「因果言いさし」の意味解釈メカニズムについて考察を行った。その結果、中国語の「因果言いさし」は接続マーカーの使用が必ず必要ではなく、「有標識因果言いさし」と「無標識因果言いさし」との二種類に分けられ、用法は日本語のよりかなり限定されることが明らかにされた。事態の理由の捉え方を表す場合、中国語の「因果言いさし」は推量モダリティと共起しにくく、日本語に比べると使用範囲が狭いと指摘している（p. 104）。また、「断り」のような聞き手への働きかけを表す場合、中国語の「因果言いさし」は、相手との親疎・上下関係及び事態の重さに敏感に反応し、特に「有標識因果言いさし」は理由を際立たせる際に使用頻度が高まることがわかったと指摘している（p. 104）。

田（2016）の研究は「言いさし」の「けど」類を中心に考察し、研究対象がかなり限定されていると言える。場面も「断り」に限定され、ほかの場面については触れられていない。そして、中国語の場合について「言いさし」のような表現も存在するため、中国語で考察している文献もあるはずであるが、この研究では言及していない。

４．日中両言語の中途終了文におけるポライトネスの先行研究

日中両言語による中途終了文のポライトネス表現に関する研究には、その代表的な研究として、楊（2012）、袁（2018）が挙げられる。

楊（2012）は、「言いさし表現」を研究対象とし、語用論的なアプローチで分析を行った。具体的には、日本語の言いさし表現から見られる話者の言語行為に関する考察を行い、会話の原理との関係を明らかにし、さらに言いさしにおけるポライトネスを考察した。研究対象としては、文学的文章と実用的文章に分け、日本語の脚本、小説、日記、手紙、報道を取り上げた。B&L の提出した五つのストラテジーの中で、言いさし表現はどれも存在すると指摘した。

まず、あからさまに言う場合、依頼・命令・不満などの言語行為によく見られると指摘した（p. 54）。次に、ポジティブ・ポライトネスの場合、提案・約束・同意・願望・賛美などの言語行為に、ポジティブ・フェイスを満たすために、協力者という立場に立ち、相手との共通基盤を求め、グループ内の言葉を使うなどをして親近感を示すことと指摘した（p. 55）。ネガティブ・ポライトネスの場合、依頼・命令・感謝・陳謝・不満などの言語行為に、聞き手の負担を最小限にするために言いさし表現が使われると指摘した（p. 56）。そして、オフ・レコードの場合、聞き手にほのめかしやヒントを与えることにより、最も侵害度が低いまま済む、すなわち最もポライトネス的なストラテジーであると述べた。特に、話し手は相手との友好関係を維持するために故意に協調の原理に違反して、会話の含意を引き出すことが多いといい、一方話し手の発話意図が相手に理解されない可能性もあるので、慎んだほうがよいであろうと指摘した（p. 61）。さらに、FTA をしない場合、言いさし表現を使用することにより話題を変える、

あるいは回避することができると指摘した（p. 61-62）。

袁（2019）は、日本語ドラマの台詞を起点テキストとして、日本語の（イン）ポライトネス表現形式を分析している。また、対応する中国語の字幕を中国語の（イン）ポライトネス表現形式として対照研究を行った。その中で、オフ・レコードの言語形式は言いさし文（中途終了文）であると指摘し、その翻訳の特徴を分析している。まず、日本語の言いさし文は、「述語省略」の場合を除き、主節を補って中国語に訳すことは稀であると指摘している（p. 44）。したがって、オフ・レコードのストラテジーはオフ・レコードのまま翻訳されることになるが、接続助詞はほとんど訳出されないため、形の上ではあからさまにFTAを行う陳述文となってしまい、原文よりもポライトネスの度合いが低くなってしまうことが多くみられると述べている（p. 44）。そして、中国語字幕では、程度副詞（“都”“还”など）や語気助詞（“啊”“呢”など）で語気を強めることがあるが、逆に、語気を和らげる語気助詞（“吧”“嘛”など）が現れることもあると指摘している（p. 44）。

従来の研究は、それぞれの対象範囲や分析の視点が異なり、考察が進められてきた。しかし、先行研究の中には以下のような課題が残されている。①述部が欠如しているタイプの中途終了文において、構文レベルでの詳細な分類が不十分であること。②日本語と中国語の中途終了文の対照研究が少ないこと。③インポライトネスの視点からの分析がほぼ見られないことである。従って、これらの課題を踏まえ、構文的特徴、意味的特徴、対照研究、語用論（ポライトネスとインポライトネス）を通じて、今後の課題として日本語と中国語における中途終了文の使用実態を明らかにすることがわかった。

５．中途終了文に関する一考察

５．１　ポライトネス

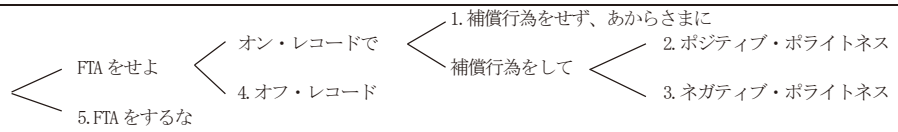
５．１．１　Brown and Levinson（1987）のポライトネス理論

本章では、ポライトネスとインポライトネスの視点から、Brown and Levinson（1987、引用は日本語訳（2011年）による、以下B&L）とCulpeper（1996）の理論を用い、中途終了文の場合、具体的にどのようなストラテジーを使うのかについて考察する。

B&L（1987）の理論によると、全ての人間にはネガティブ・フェイス（すべての「能力ある成人構成員」が持っている、自分の行動を他者から邪魔されたくないという欲求）とポジティブ・フェイス（すべての構成員が持っている、自分の欲求が少なくとも何人かの他者にとって好ましいものであってほしいという欲求）がある（日本語訳p. 80）。このフェイスを脅かさないように配慮し円滑なコミュニケーションを維持していこうとする言語行動がポライトネスである。ポライトネスとは、２つのフェイスが侵害行為によって満たされず、フェイスが脅かされる（Face-Threatening Acts、以下FTA）可能性があるとき、フェイス侵害を補償・軽

減するポライトネス・ストラテジーによって、聞き手のフェイスを保持することである。FTAの度合いは、話し手と聞き手の「社会的距離」、話し手と聞き手の相対的「力」、特定の文化における絶対的な「負荷度」の度合いによって決められている（pp. 97-98）。

B&L（1987）は、ストラテジーを以下のように大きく５つに分けている。



1. ストラテジー不使用：あからさまに言う。
2. ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー：聞き手のポジティブ・フェイス欲求を満たすストラテジー。
3. ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー：聞き手のネガティブ・フェイス欲求を満たすストラテジー。
4. オフ・レコード：ほのめかす。
5. FTA を行わない：行為を行わない。

図１　FTA を行うための可能なストラテジー

出典　Brown and Levinson（1987，日本語訳 p. 89）

５．１．２　ポジティブ・ポライトネス

B&L（1987）によれば、ポジティブ・ポライトネスは、聞き手のポジティブ・フェイス、つまり「聞き手が求める肯定的自己イメージに向けられる」（p. 91）。中途終了文は、ポジティブ・ポライトネスとして使われる。例は（12）である。

（12）A：確か佐藤さんは池袋に住んでいますよね。
　　B：何年か前までは…。

（12）は、A は B に確認を求めているのに、B はそれを否定しなければならない場面である。文法的には、「までは」により「住んでいた時期の区切り」と「現在との対比」を表す。そして、B は A の話す内容を全て否定することを避けるために、何年前のことは言う必要がないのに、わざわざ話し、A の確認内容の一部分、すなわち、何年前池袋に住んでいたけど今はもう住んでいないということを認め、相手のポジティブ・フェイスへの侵害を和らげることができる。

５．１．３　ネガティブ・ポライトネス

B&L（1987）によれば、ネガティブ・ポライトネスは、主に聞き手のネガティブ・フェイスに向けられ、「それを（補償し）部分的に満足させようとする」（p. 91）。ネガティブ・ポライトネスは中途終了文のポライトネスとして使われる。例は（13）である。

（13）女子高生：千円でいいです。さいふに千円残っていますから。（中略）明日の朝、一番に持ってきますから。

（『天気の子』、下線部は筆者による）

（13’）千円でいいです。さいふに千円残っています。（中略）明日の朝、一番に持ってきます。

（13）は、女子高生が警察にタクシー代を借りたいと頼んでいる場面である。この会話では二つの中途終了文がある。前者は事情説明であり、「から」により前文との繋がりが明確になる。後者は約束であり、「から」により説得力を高め相手の負担を下げると考えられる。そして、（13’）と比べてみると、二つの「から」により話し手の口調が弱くなり、依頼の内容を再び強調すると考えられる。さらに、中途終了文の並列により、相手の負担を徐々に下げることができる。この場合、相手のネガティブ・フェイスへの侵害を和らげることができる。

５．１．４　オフ・レコード

B & L（1987, pp. 300-325）によれば、オフ・レコードは、「行為者は、自分の行為を弁護できるような解釈をいくつか用意することで、自らに『逃げ道』（out）を残している場合」という。話し手の実際の発話意図を知りたい場合、聞き手は推論を行う必要がある（p. 300）。例は（14）である。

（14）（B は時計をわざと見て、小声で）
B：え、もうこんな時間…
A：あ、すみません、あと授業あるよね。それじゃまた。

これは、学校で B が同級生の A と話している途中の場面である。B はこれから授業があるため、話を終わらせようと考えられる。「（もうこんな時間なので）これで失礼します」という含意（implicature）を相手に伝える。この場合、FTA を直接的に行わずに会話を終わらせることで、話し手はその含意を曖昧にしておくことができる。

５．２　インポライトネス

Culpeper（1996）は B&L のポライトネス理論とは対照的に、相手のフェイスを気にしない段階から、積極的にフェイスを脅かす段階までの度合はあるものの、相手のフェイスをないがしろにする行為をインポライトネスであると論じた。

そして、Culpeper（1996）は、あえて FTA を行うための、以下の五つのインポライトネス・ストラテジーを提案している。

1．Bald on record impoliteness：補償行為をせず、あからさまに FTA を行う。たとえば、フェイスを極めて重視する場合、直接的に FTA を行うこと。
2．Positive impoliteness：聞き手のポジティブ・フェイスを脅かすインポライトネス。たとえば、相

手を無視する、除外することなど。

3．Negative impoliteness：聞き手のネガティブ・フェイスを脅かすインポライトネス。たとえば、相手を脅かす、侮辱することなど。

4．Sarcasm or mock politeness：皮肉または慇懃無礼。

5．Withhold politeness：ポライトな言語行動が期待されている場面で、ポライトな言語行動を避ける。例えば、誰かにプレゼントをもらうとき、相手にお礼を言わないことなど。

Culpeper（1996，pp. 356-357、翻訳は筆者より）

その中で、インポライトネスにおける具体的なストラテジーとして、「見下す、軽蔑または嘲笑する」について、中途終了文にも存在することがわかる。例は（15）である。

（15）あおい：自分より下手なやつと組んでも時間の無駄だから。

（『空の青さを知る人よ』

（15'）自分より下手なやつと組んでも時間の無駄だ。

（15"）自分より下手なやつと組んでも時間の無駄だから、あなたと組みたくない。

（15）では、相手の気持ちに全く配慮せず、直接的に自分の考えを相手に表明し、相手を見下す。「から」がない（15'）では、単なる事情説明である。（15）と比べてみると、「から」を使うことにより原因・理由を表し、（15）は（15'）と（15"）よりその結果を相手に強く伝え、「私はあなたと組みたくない」という含意が生じると言える。さらにインポライトネスになると考えられる。

6．終わりに

本稿では、中途終了文に関する研究を定義、意味的特徴、対照研究、語用論（ポライトネスとインポライトネス）という四つの視点から概観した。まず、中途終了文は主に三つのタイプに分類される。接続助詞で言い終わるタイプでは、白川（2009）が代表的な研究として挙げられ、その他、佐藤（1993）、曺（2004）、朴（2012）などもこの分類に属する。文の途中で言い終わるタイプの研究では、荻原（2008）の研究が代表的な研究として挙げられ、その他、山路（2009）、呉（2022）、大塚（2025）なども考察した。そして、間投詞で終わるタイプに関しては、劉（2003）、呉（2016）などがある。次に、日本語と中国語の中途終了文に関する先行研究について、劉（2007）、楊（2002）、許（2007）、呉（2016）、田（2016）などがある。日中両言語の中途終了文におけるポライトネスの先行研究について、楊（2012）、袁（2018）などがある。最後に、ポライトネスとインポライトネスの視点から、中途終了文について考察を試みた。

本研究では、先行研究を踏まえ、中途終了文を、「形式上、途中で言い終わる文」と定義した。

そして、①接続助詞で言い終わる文、②文の途中で終わる文、③複文において主節の一部が省略される文は中途終了文として認めた。ただし、一つの間投詞のみで構成される発話は、発

話の意味が限られるため、本研究では研究対象としない。

従来の研究は、それぞれの対象範囲や分析視点が異なり、考察が進められてきた。しかし、先行研究には以下のような課題が残されている。①構文レベルで、述部が欠如している中途終了文の分類が不十分であること。②日本語と中国語の対照研究が少ないこと。③インポライトネスの視点からの分析がほぼ見られないことである。従って、これらの課題を踏まえ、構文的特徴、意味的特徴、対照研究、語用論（ポライトネスとインポライトネス）を通じて、今後の課題として日本語と中国語における中途終了文の使用実態を明らかにすることがわかった。

【参考文献】

和文文献

伊集院郁子（2004）「ポライトネス・ストラテジーとしての発話末省略に関する一考察」『東京大学外国語教育学研究会研究論集』8，14-31.

宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用：スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』662，27-42.

袁青（2019）『中国語字幕の翻訳戦略：日本のドラマにおける（イン）ポライトネス表現を中心に』［博士論文、東北大学大学院国際文化研究科］（https://tohoku.repo.nii.ac.jp/records/128306）.

大塚容子（2025）「インタラクションにおける「中途終了発話文」の機能：日本語教育の観点から」『岐阜聖徳学園大学紀要』64，1-13.

大堀壽夫（2002）『認知言語学』東京大学出版会.

楠本徹也（2015）「中途終了型発話文「～けど」「～ので」の要求・断り行為場面における待遇的談話機能」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』41，47-60.

呉秦芳（2022）「日本語の談話における「言いさし文」の特徴：文法的特徴、談話構成、談話機能の要素を取り入れた「心的態度」の探求をめざして」『比較文化研究』149，67-79.

呉琳（2016）『日本語の話し言葉における言いさし表現に関する考察』［博士論文、杏林大学大学院国際協力研究科］（https://v3opac2.kyorin-u.ac.jp/webopac/TD10154646）.

国立国語研究所（1960）『話しことばの文型（1）：対話資料による研究』秀英出版 .

佐藤勢紀子（1993）「言いさし『…が／けど』の機能：ビデオ教材の分析を通して」『東北大学留学センター紀要』1，39-48.

白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版.

曺英南（2004）「字幕付き映画における韓日の言いさし表現の対応関係：「述部有り」の言いさし表現を中心として（村松賢一先生退官記念号）」『言語文化と日本語教育』27，102-115.

高橋太郎（1993）「省略によってできた述語形式」『日本語学』12（10），18-26.

陳文敏（2000）「日本語母語話者の会話に見られる「中途終了型」発話―表現形式及びその生起の理由―」『言葉と文化』1，125-141.

田昊（2016）『日本語教育文法における『言いさし』の研究』［博士論文、一橋大学大学院言語社会研究科］（https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/hermes/ir/re/29697/lan020201601003.pdf）.

朴仙花（2012）「中国人日本語学習者による文末表現の使用に関する考察：断り発話を事例として」『言葉と文化』13，95-113.

荻原稚佳子（2008）『言いさし発話の解釈理論：「会話目的達成スキーマ」による展開』春風社.

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法―改訂版』くろしお出版.
三上章（1955）『現代語法新説』くろしお出版.
水谷信子（1989）『日本語教育の内容と方法：構文の日英比較を中心に』アルク.
南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
李洪宏（2012）『「言いさし」表現に中日対訳のストラテジー』［修士論文、沈阳师范大学外国语言学及应用语言学］（https://oversea.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?dbcode=CMFD&dbname=CMFD201301&filename=1012364222.nh&uniplatform=OVERSEA&v=YLUU_4yanDNk4EiOTsAeXyCj2XRIDC-uo4d3br8CmayAxBxm-EbpICrHshtgYDCt）.
劉雅静（2003）「日本語における「言いさし」表現に関する考察：「発話機能」と「配慮の分析を中心に」『日本学研究』13，277-294.
山路佳恵（2009）「日本語会話における中途終了型発話：ある職場における会話から」『日本語・日本文化研究』19，191-202.
楊勤（2012）『語用論による日本語言いさし表現の研究：話し言葉を中心に』［修士論文、宁波大学日语语言文学］（https://oversea.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?dbcode=CMFD&dbname=CMFD201301&filename=1012050626.nh&uniplatform=OVERSEA&v=HNMGcjwoNi6KZH8bcgzVnw27CGJMUtvvfe7D2P-DCc_rOP6mEyd_hdicWcLCVfB-）.
Brown, P., & Levinson, S. C.（2011）『ポライトネス：言語使用における、ある普遍的現象』研究社.［田中典子（監訳）・斉藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子（訳）］

中文文献

劉影（2006）『半截话的产生机制及语用策略研究』［硕士论文、吉林大学语言学及应用语言学］（https://oversea.cnki.net/KCMS/detail/detail.aspx?dbcode=CMFD&dbname=CMFD2007&filename=2007103479.nh&uniplatform=OVERSEA&v=xwGmLIQ-eQW-MT-jPpk30c7JuhgNt4O2xVfmGF6Flvf8rU9iEmhuJELcsZV4wilC）.
楊德峰（2002）「半截话格式的修辞作用」『修辞学习』第４期，31-32.

欧文文献

Brown, P. and Levinson, S.（1987）. Politeness: Some Universals in Language Usage. Cambridge, Cambridge University Press.
Culpeper, J.（1996）. Towards an anatomy of impoliteness. Journal of Pragmatics 25. pp. 349-367.

【資料】

１．新海誠『天気の子』（「天気の子」製作委員会、2019年）
（https://www.bilibili.com/bangumi/play/ep332611?theme=movie&spm_id_from=333.337.0.0、最終閲覧日2025年８月５日）
２．長井龍雪『空の青さを知る人よ』（「空の青さを知る人よ」製作委員会、2019年）
（https://www.bilibili.com/bangumi/play/ep336052?theme=movie&spm_id_from=333.337.0.0、最終閲覧日2025年８月５日）

（おう　しえい：城西国際大学大学院人文科学研究科 博士課程比較文化専攻在籍）

Abstracts

A Contrastive Study of Incomplete Sentences in Japanese and Chinese[1]: An Overview of Previous Research and Future Directions

Wang ZiYing

This paper begins by clarifying the definitions of "incomplete sentences" in Japanese and Chinese. It then proceeds to examine the unresolved issues identified in previous research on the topic. It further attempts to analyze such sentences from politeness and impoliteness perspectives. While existing studies have advanced our understanding from various perspectives and within different scopes, several critical challenges remain unaddressed. In light of these limitations, this study aims to elucidate the actual usage patterns of incomplete sentences in both languages. This will be achieved through a multifaceted analysis encompassing their syntactic features, semantic characteristics, contrastive research, and pragmatic functions—particularly focusing on aspects of politeness and impoliteness. Ultimately, this framework is proposed to establish a clear direction for addressing the unresolved issues as key objectives for future research.

[1] The abstract was generated using the AI model "DeepSeek" for English composition. The author assumes full responsibility for the content presented herein.